



ガハテ村通信

篠山ナマステ会 兵庫県篠山市中野28 中野隣保館内 TEL/FAX 0795-94-3979 振替口座 00930-6-29629

セティディビ小学校竣工式に参加

この子たちに明るい未来を



去る八月四日、篠山ナマステ会の一行を迎えて、セティディビ小学校の竣工式が行われました。
村を挙げての大歓迎の中、市内の小・中学校から寄せられたノートやエンピツなど、学用品が贈呈され、これからのいよいよ本当の交流が始まります。



ガハテ村 ←→ 篠山・今後の交流を見つめて



ツアー参加者の現地座談会

(カトマンズ ペンション「VASANA」にて)



一行を出迎える全校生の列

参加者

- 渡辺 省悟
- 篠山ナマステ会前代表
- 武部 宣男
- 篠山ナマステ会募金部長
- 小嶋 英毅
- 篠山市教育委員会
- 喜多川 直子
- 丹南中学校教諭
- 永尾 明世
- 今田中学校教諭
- 坂本 守啓
- 丹波新聞記者
- 藤野 達也
- PHD協会総主事代行

小嶋(司会) 竣工式でスピーチをした村の人々はどんなことを伝えようとしていたのですか。

渡辺 最初に挨拶をしたPTA会長と最後に締めくくったバラト・ピスタさんは、「思いもしなかったことが実現し、将来に向けての希望がわいて来た。」「今までは篠山ナマステ会を中心とした活動でここまでこぎつけた。次は私たちがその意志を無にしないように頑張らないといけない。」と、共通した事をしきりに言っていましたね。

「いくら地位があろうと、口先では何とでも言えるが最後は行動だ。」と、実に本質を突いた事を話していましたね。小嶋 そうでしたか。村人の心が伝わって来ますね。皆さんはどのように受け止められましたか。

永尾 日ごろどういう授業が行われ、どういうシステムで学校が運営されているのかについてはよく分かりませんでした。教科書を見せてもらうと、新しく英語で書かれています。しかしノートには小学校レベルの掛算が書かれていたり、教科書と実際の

セティディビ小学校から 篠山ナマステ会への感謝状



ガハテ村は山と段々畑があつて、周りにはヒマラヤ、下には川があります。ここには貧しいタマン族が住んでいます。こんなに美しい村だけど、勉強が出来なくて、いつも暗くて何も見えず、発展出来ていません。時間、年月が流れていって、一つの小さな学校(寺子屋)を作ったのですが、先生もなく、必要な道具を揃えることが出来ませんでした。そこでSSSの会長バラト・ピスタ氏を通して、日本のナマステ会の皆様がこの村に来

られました。そして話し合いの結果、この村にとっても必要な学校をつくる事が出来ました。また、机とか椅子など必要なものまで揃えてくれました。

このことでタマン族の人たちやその子どもたちが少し明るい光を見ることが出来ています。子どもたちの親たちも学校のおかげで明るい未来が見えるでしょう。人間にとって、一番必要な勉強が出来るようになり、ガハテ村民より日本のナマステ会の皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

経営委員会委員長
テーク・バハドゥール・タマン
セティディビ小学校 校長
クリシュナ・バハドゥール・タマン

授業がうまくかみ合っているのだろうか、とも思いました。でも一生懸命にノートに書いてある字を見て、うれしくなりました。

喜多川 よい建物が建っていました。屋上から前の学校が見えたのですが、本当にぼつんとしたもので、新しい学校との違いが大きく、村の人にとって大きな喜びだったと感じます。授業風景を見たかったです。子どもたちがどう感じているか聞けば、もっとよかったです。

武部 建築をやっているのが気になったのは、学校に使われていた鉄筋の数です。ネパールでは地震がありませんが、日本では考えられないほど少ないです。また、山を登る道中には心配していた通り、一部崩壊が見られました。それを防ぐために、根の強い木を植えなければと思います。

また、維持管理に五年間の支援を続けることになっていきますが、おそらく政府からの予算が出るということは、この国では難しいのではないかと感じたりもします。今後の運営をどうやっていくかが問

題になるでしょうね。

小嶋 支援活動がああいう形で実ったということは、いろいろ課題もあるものの、子どもたちが待ち望んでいたということが伝わったし、ナマステ会として大事な活動の第一歩になったのではないかと思います。PHD協会が言うように「半分は自分たちのため」と考え、現地の人がどんな思いで学校を望んでいたかということを実際に見たり、文通したりして気持ちをつないでいけば、対等な形でパイプがつけられるのではないかと思っています。その意味でも現職

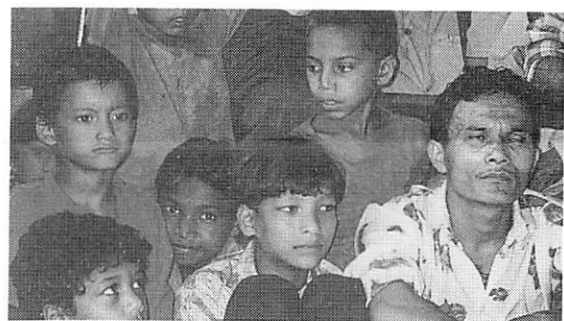


村あげてのお祭りさわぎ

の先生にはもっと関心を持ってもらえるよう、働きかけなければいけないと思います。

坂本 式の後、一人の女の子に感想を聞いてみると「うれしくて言葉にならない。」と言っていました。また支援物資をどう使うかと校長にたずねると、「家には持ち帰らず、学校で大切に使います。」という返事でした。「建前」のスピーチではなくて、本当に学校を待ち望んでいたのだということを感じ取れたように思っています。

また、五人の奨学生の写真を撮った時に、一人ずつどんな子か少しだけききましたが、ガハテ村で一番貧しい家庭から来ている子、父や母がいないう子などがいました。このような境遇の子どもたちは、小学校が建たなければ学校へ行けなかったらどうと思います。その反面、親の理解がないのも大きいですね。その親の世代は「なぜ自分は教育を受けなかったのだろう。」と後悔しているといえます。親は「行かせたい、しかし、経済的な問題で行かす事が出来ない。」という悩みがあるようです。



この子たちの幸せのために

小嶋 そのことはビスタさんも言っておられましたね。お金がなくても学校へ子どもを行かせなさい、自分と同じ轍を踏ませてはなりません。と、大人たちに呼びかけられたようです。

渡辺 タマンは村の中でもひととき貧しいところ、そこに建てたことに大きな意義があります。

小嶋 今後、ナマステ会の支援活動としてどんなことをしていけばよいのでしょうか。

喜多川 ビデオで現地の様子を見るのは話を聞くだけよりいいと思います。そういうのが定期的に出ればいい。

同世代の小学生同士の交流が出来ればさらにいいのではないのでしょうか。

永尾 確かに中学生は「やってあげている。」という感覚になりやすいと思います。そういう意味でも小学生同士の交流が望ましいと思います。

藤野 (PHD協会) 現地ではビデオを撮影することも見ることもできません。「写真を使った文通」のような形で交流をすればよいのではないですか。

武部 三年後には子どもの数が減るのでは、という不安を感じます。大きくなると家の手伝いに間に合うようになるので、親がだんだん学校へ行かせなくなるのではないかと心配です。

小嶋 篠山とガハテ村が対等の立場に立った交流こそ、大きな意義があるわけですから、現地の子どもたちの「勉強したい」という思い、教師たちの熱意、村人たちの期待、また、家族が互いに助け合って生活している姿など、そういったものをこれからの交流で再確認し、また日本の子どもたちに発見してもらいたいと思っています。

相互の理解と共生へ

アジアの青年と中学・高校生の交流 IN SASAYAMA

PHD協会が招いているアジアからの研修生と、
市内の中学・高校生の交流会が開かれました。



谷口教育長も激励

日時 8月18日
場所 篠山市後川「たんば農文塾」
参加者 アジアからの研修生
スウェインさん（ミャンマー）
ダルミアティスさん
(インドネシア)



スウチさん（タイ）
中学生 6名 高校生 5名
エイサー太鼓グループ 12名
PHD職員・引率の先生
篠山ナマステ会員・ボランティアの
みなさん合わせて48名

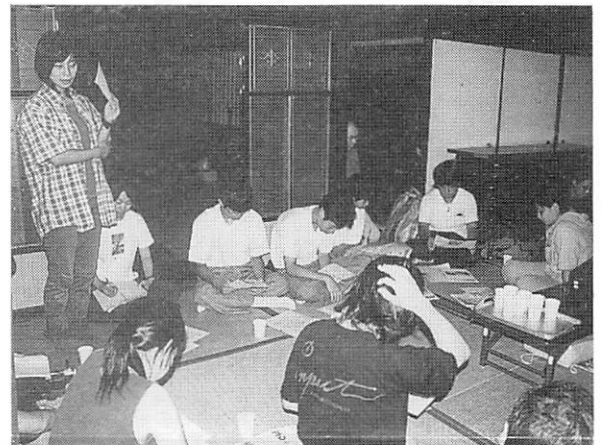
まずスライドにより研修生の出身国の紹介があり、研修生から日本で何を学んでいるか、それぞれの思いを聞いた後、研修生を囲んでのフリートークをしました。3つのグループに別れて研修生の村での暮らしや、食べ物、現地の子どもの様子などを尋ねるなど、和気あいあいと話はずみしました。

その後お菓子作りに挑戦、インドネシアのお菓子「ゴットー」日本のお菓子「白玉だんご」を、みんなで分担・協力しながら、楽しく出来ました。

夕食はスタッフが作ったカレーライス、みんなで作ったお菓子、デザートはさし入れのスイカなど大好評でした。

ナイトタイムはゲストに招いたエイサー太鼓グループの演奏があり、静かな山間に勇壮な太鼓の音が響き渡り、その迫力に圧倒されながら、実際に太鼓を叩かせてもらっての交流に、時間の経つのも忘れて楽しい「夏の思い出」の一時をすごしました。

なお、当日事情により参加出来なかった篠山ナマステ会員や、地域の皆様から、心の参加で応援しますとして、金一封や野菜、スイカ、ジュース、ビールなど、多くのカンパを頂き、ありがとうございました。



うちとけてトークがはずむ

募金の報告

前年度より繰越	689,321円
本年度募金収入	121,065円
ネパールへ送金	581,500円
現在残高	228,886円

以上の通りですが、今後の支援活動のために、更に一層のご協力をお願い致します。